

中学生を対象とした漢字読み書き正確性に関する
新たな指標作成の試み

**Developing a New Scale for Reading and Writing Accuracy
of Kanji for Junior High School Students**

荻布 優子¹⁾³⁾・川崎 聡大²⁾³⁾
Yuko OGINO* and Akihiro KAWASAKI

要旨 (Abstract)

本研究の目的は、中学生を対象とした漢字読み書き正確性の評価指標を新規開発することにある。小学6年生配当漢字から中学生で学習する学年配当漢字以外の常用漢字全ての範囲から幅広く課題作成することで、「読み書き困難」を検出するだけでなく生徒の漢字読み書き正確性の習得の程度を評価することを試みた。中学1年生211名を対象に読み・書きそれぞれ40単語からなる新規作成を実施し、その結果について主成分分析を行ったところ、読み書きそれぞれ2成分に収束した。小学生に対して同様の方針で課題を作成した先行研究(荻布ら, 2019)と比較すると、書きでは小学生で1成分、中学生では2成分に収束と異なる結果となった。これは小学生と中学生では新出漢字の習得方法が異なること、漢字学習に求められる水準の異なりが関与するのではないかと考えられる。合わせて今後、課題に採用した漢字単語の単語属性や画数に関する分析や、個人の語彙力や学習到達度との関係を検討することが必要であると考えられた。

キーワード：漢字、読み書き正確性、評価指標、発達性読み書き障害、中学生

I. はじめに

1. 中学生における漢字読み書き指導の目標

学習障害の中核である限局性学習症 (SLD) は読み書き計算の獲得と使用における特異的な困難さを主徴とする。この読み書きに特異的な苦手さを有する児童生徒 (本稿では教育的支援の対象を指し示す意図で「読み書き困難」と称する) の出現率は、文字種によって異なることが知られている。小学生の読み書き正確性に関する調査を行った Uno et al. (2009) によれば、読みはひらがな 0.2%、カタカナ 1.2%、漢字 6.7%、書きはひらがな 1.2%、カタカナ 2.1%、漢字 8.0% であり、読み書きいずれもひらがな、カタカナに比して漢字の困難さを有する児童が多く存在している。本稿で着目する中学生では小学生よりも学習する漢字数は増加することから、小学生と同程度に漢字の困難さを有する、あるいは小学生以上に漢字に困難さを有する生徒が多く存在する、といった可能性も考えられる。

1) 奈良学園大学人間教育学部 (現所属)

2) 立命館大学産業社会学部 (現所属)

3) 東北大学大学院教育学研究科 (研究実施時所属)

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（文部科学省，2018）では、漢字の取り扱いについて表1のように示して解説している。小学校段階ではどの学年でどの漢字を学習するかを示した学年別漢字配当表が示されているが、中学校段階では学年別配当表に示された1026字に加えてその他の常用漢字を順々に習得し、中学校の3年間で常用漢字の大体を読むこと、学年別配当表に示された漢字を文や文章中で使い慣れることを目指すこととなる。小学校と大きく異なる点は、学年別配当表が存在せず学習の順序は学校現場（現実的には採択する教科書）に任されていること、漢字そのものの読みや書きというよりも話や文章のなかで文脈に即して読み書きすることが強調されているということであろう。そのため小学校段階で行われるような新出漢字の一文字ずつの一斉指導は行われなくなり、ドリル形式や書き取りの宿題が出されることも極めて少なくなり、新出漢字の習得は生徒個人の努力に委ねられる形であると推測される。

表1 中学校学習指導要領における漢字の取り扱い

小学校第5学年 及び第6学年	第1学年	第2学年	第3学年
エ 第5学年及び第6学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。	イ 小学校学習指導要領第2章第1節国語の学年別漢字配当表（以下「学年別漢字配当表」という。）に示されている漢字に加え、その他の常用漢字のうち300字程度から400字程度までの漢字を読むこと。また、学年別漢字配当表の漢字のうち900字程度の漢字を書き、文や文章の中で使うこと。	ウ 第1学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字のうち350字程度から450字程度までの漢字を読むこと。また、学年別漢字配当表に示されている漢字を書き、文や文章の中で使うこと。	ア 第2学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字の大体を読むこと。また、学年別漢字配当表に示されている漢字について、文や文章の中で使い慣れること。

*中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説国語編p41より引用

2. 中学生における漢字読み書き正確性評価の現状

中学校学習指導要領のなかで漢字の読み書きに共通して強調されている「文脈に即して使う」という点を評価するには、同音異義語（同音異字語）の使いわけや、文章中の漢字で表せる語句を漢字で適切に表記しているか、その意欲があるか、といった観点から定性的に見ていくことが現実的であろう。ただ漢字読み書き正確性の習得（学習指導要領解説の中では「漢字一字一字の音訓の理解」「字体、字形、音訓、意味や用法などの知識を習得」と表現される）がなされていなければ、文脈に即して使用することが困難という状態象となることは自明であり、学習到達度としてではなく指導の力点を模索するために定量的な漢字読み書き正確性の実態把握がなされることは望ましい形であると考えられる。

中学生の漢字読み書き正確性の評価手法を概観すると、まず教育の文脈における「テスト」が挙げられる。小学校段階のように定期的に漢字テストが設けられ習得度をその都度確認されるということは少ないが、定期試験などの中で漢字の読みや書きに特化した設問がなされる場合はある。ただし定期考査の一環であればあくまでも学習到達度の一指標であり、指導のためのアセスメントの役割は想定されていないものと推測される。

学習障害をはじめとする発達障害臨床の文脈において中学生を対象とした指標では、まず STRAW-R 改訂版標準読み書きスクリーニング検査（宇野ら，2017）が挙げられる。STRAW-R はあくまでも発達性読み書き障害のスクリーニングを目的とした検査であることから、刺激語は小学校の学年配当漢字で構成されている。漢字読み書き正確性の相対的評価指標には日本版 KABC- II（Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition）の習得度尺度の下位検査「ことばの読み」「ことばの書き」があり、いずれもひらがな・カタカナ・漢字を正しく読めるか、書けるかを測定することができる。標準化された検査であるものの、個別式検査であり教室場面での一斉実施が難しいこと、部分実施が認められないこと、など教育現場での漢字読み書き正確性の習得状況を簡便に把握する目的での応用には適していない。PC を用いてインターネット環境下で実施される高橋ら（2009）の適応型言語能力検査（ATLAN）のなかには選択肢方式の漢字読み書き正確性の課題があり、2015 年にはタブレット端末を用いた漢字書取課題も開発されているが（高橋ら，2015）、GIGA スクール構想の実現以前の開発であったことから公教育での十分な浸透には至っていない。そのほか発達性読み書き障害に関する研究知見をみても中学生を対象とした報告自体が極めて少なく、中学生に特化して漢字読み書き正確性を評価しようとしている報告は見当たらない。

教育、発達障害臨床のいずれの文脈においても中学生の漢字読み書き正確性の評価への注目度は高いとは言いがたく、中学生で学習する漢字を用いた指標であり、かつ学習指導要領に示されるような教育目標の達成の一助になりうる指標が開発されることが望ましいと考えられる。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、中学生を対象とした漢字読み書き正確性の評価指標を新規開発することにある。開発の指針は、筆者らが過去に開発した学力とも関連する小学生の漢字読み書き正確性の相対的評価指標（荻布ら，2019）に準ずることとした。この指標では小学校学習指導要領に準じて前学年・当該学年の配当漢字を採用し、さらに相対的評価とするための工夫として次学年の合計 3 学年分の配当漢字をオーバーラップさせた課題で構成されている（例えば小学 3 年生用では、2～4 年生の配当漢字で構成される漢字単語を採用）。中学校学習指導要領では小学校で学習する漢字をより使い慣れることへの言及があることも鑑みて、小学 6 年生配当漢字から中学生で学習する学年配当漢字以外の常用漢字全ての範囲から幅広く課題作成することで、「読み書き困難」を検出するだけでなく児童生徒の漢字読み書き正確性の習得の程度を相対的に評価することを試みる。

II. 方法

1. 対象

A 県公立中学校に在籍する中学 1 年生 211 名を対象に課題を実施した。

2. 作成した課題（新規漢字課題）

課題には学年配当を統制した漢字単語を読み書きそれぞれ 40 単語を採用した。単語の選出には東京書籍の国語教科教科書のうち小学 6 年生を対象とした「新しい国語 六」、および中学生を対象とした「新しい国語 1」「新しい国語 2」「新しい国語 3」を参考に、教科書内で採用されている漢字単語を中心に構成した。

1) 読み課題

40 単語を A 4 用紙両面印刷で各 20 単語ずつ記載し、漢字単語の右横にひらがなで漢字単語の読み方の記入を求めた。小学 6 年生配当漢字のみで構成される 10 単語、中学生で学習される学年配当漢字以外の常用漢字のみで構

成される 30 単語を採用した。採点は漢字単語の全ての読み方が正しく記載されているものを正答（各単語 1 点、40 点満点）とした。

2) 書き課題

読み課題と同様に 40 単語を A4 用紙両面印刷で各 20 単語ずつひらがなで記載し、その左横に漢字単語での記入を求めた。小学 6 年生配当漢字のみで構成される 10 単語、中学生で学習される学年配当漢字以外の常用漢字のみで構成される 30 単語を採用した。採点は山下ら（2004）を参考に、漢字の構成要素が過不足なく揃っており採点者がその文字と判断できるものを正答（各単語 1 点、40 点満点）とした。構成要素間の間隔や、とめ・はね・はらいといった細部の正確さは問わないこととした。

3. 実施手続き

両課題ともに授業時間を利用し、集団で一斉実施された。問題の配布後、クラス全員の回答が終了した時点、または読み課題は最長 15 分、書き課題は最長 20 分で回答時間を打ち切り、問題用紙を回収した。

4. 分析方法

211 名の課題実施のうち、回答に不備のなかった読み課題 209 名分、書き課題 210 名分の結果を分析対象とした。荻布ら（2019）の手続きに則り、基礎統計量の算出ののち、読み書きそれぞれの得点について主成分分析を行った。全ての解析には SPSS27.0 を使用した。

5. 倫理的配慮

本研究は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の審査と承認のもとで実施された（教研倫第 20-1-066）。協力校の学力増進対策ならびに授業の一環として実施された課題のデータ提供を受け、解析を行った。データ提供にあたって書面にて学校長の同意を得ている。

III. 結果

新規作成した読み課題、書き課題、それぞれの基礎統計量およびクロンバックの α を表 2 に示す。読み課題全 40 問の各平均は 0.02~1（標準偏差 0~0.501）、書き課題全 40 問の平均 0~0.95（標準偏差 0~0.498）であった。読み課題のうち全員が正答した 1 問、書き課題のうち全員が誤答であった 1 問は、この後の分析から除外した。

読み書きそれぞれ 39 問について主成分分析を行った。因子負荷量が 0.4 を下回る問題項目を除外して主成分分析を複数回繰り返し、いずれかの成分で負荷量が 0.4 を上回り且つそれ以外の成分では 0.4 を下回るといった基準で問題項目を分類した。読み課題は主成分分析を 7 回繰り返した結果 2 成分が抽出され（第 1 成分 16 項目、第 2 成分 3 項目）、累積寄与率は 42.858%であった。書き課題は主成分分析を 5 回繰り返した結果 2 成分が抽出され（第 1 成分 19 項目、第 2 成分 6 項目）、累積寄与率は 39.043%であった。

表 2 各課題の基礎統計量

	M	SD	min	Max	α
読み課題	30.8	5.73	4	39	0.883
書き課題	18.28	6.88	0	36	0.883

IV. 考察

学年配当を統制した漢字読み書き正確性の評価指標を新規作成して中学生に実施し、主成分分析を行ったところ、読み書きそれぞれ2成分に集約された。一部で天井効果、床効果を示した設問もあったが、おおむね適切な難易度で課題構成がなされていたと考える。

今回新規作成した課題と同方針で作成された小学生用評価指標（荻布ら，2019）と比較すると、小学生用は全30問で構成されていたという違いはあるものの、読みについては①小学校5-6年生では2成分に集約された、②成分ごとに学年配当による傾向はみられなかったという点で共通した。今回第1成分には漢字2字から構成される漢字単語が集約され、第2成分には漢字1字で送り仮名があるもの（訓読みを出題、送り仮名は問題用紙に記載されており漢字1文字の読みの記入を求める設問）に分かれた。小学生版ではこのような違いは見られておらず、今回の中学生版特有の特徴であるといえる。小学生を対象とした漢字の読みに関する検討では単語属性の関連が指摘されており（土方ら，2011；明石ら，2013；三盃ら，2016）、今回の課題も単語属性の検討や、漢字2字の単語であっても音訓の組み合わせ、また中学生では新出漢字の習得が個人に委ねられていることに鑑みて個々の語彙力との関連などからさらなる分析が必要であると考えられる。少なくとも漢字二字の漢字熟語と、送り仮名のある訓読み漢字では、中学生も場合には習得しやすさに違いがある可能性が示唆されたと考える。

書きでは小学生版ではどの学年でも第1成分に集約されていたが、中学生版では2成分に集約されるという違いがみられた。今回は単語属性についての統制や詳細な分析は行っていないものの、第1成分には小学6年から中学までの全ての学年で学習する漢字が含まれ、第2成分には今回参考にしてしている教科書の2-3年生で新出漢字として示される漢字2文字で構成される単語ばかりが集約された。小学生版では第1成分に集約されたことから、新出漢字を一文字ずつ教授され漢字を習得していく小学校段階では、習時期（学年配当）と評価時期が1-2年程度の違いであれば既習漢字であれ未習漢字であれ学年配当や単語属性を考慮することはそれほど重要ではない可能性が指摘されている（荻布ら，2019）。しかし中学校段階では学習する漢字には配当学年は定められていないものの、中学校学習指導要領解説国語編に「一字一字の音訓を理解し、語句として、話や文章の中において文脈に即して意味や用法を理解しながら読むことが求められる。」とあるように小学校段階に比して語句・熟語としての漢字学習が強調されていることを踏まえると、今回参考にしてしている教科書で学習学年が上がるにつれより抽象度の高く生活上では馴染みが薄いなどより習得の難易度が高い語句が配置されている可能性はあると考えられる。井村ら（2011）は定型発達の小学生では既習漢字（2年前の学年配当漢字）の書字成績には親密度が関与することを報告しており、今回対象としている中学生においても漢字書字正確性には親密度が関与する可能性が示唆されたと考える。しかし小学生と中学生では新規漢字の習得方法が異なること、漢字単語に対する親密度は学年進行によっても変化しうることなど考慮する要素は多様に存在するため、今後詳細な検討が必要である。

V. 今後の展望

今回の新規課題の開発では漢字単語の単語属性や画数、また学習到達度との関連の検討ができておらず、試作に留まっている。中学校学習指導要領において漢字の読み書きでは「文脈に即して使う」ことが強調され、小学校段階に比して「漢字」に対して求められる水準が大きく引き上げられる中学校段階では、小学校段階から読み書き困難を呈する児童ももちろん変わらず読み書きは困難であろうが、中学校段階で困り感が顕在化する「読み書き困難」生徒は、小学校段階で困り感が顕在化していた読み書き困難児童とは指し示される状態象やその機序が一部異なっている可能性も考えられる。この部分のアセスメントに対応するためにも、今回選出した漢字単語の詳細分析や、語彙力や学力など他の指標と合わせて聴取したうえでの検討が今後必要である。

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

謝辞

本研究遂行にあたり調査にご協力いただいた中学校の教職員、生徒のみなさまに心より感謝いたします。

文献 (References)

- 1) 明石法子、宇野彰、春原則子、他 (2013). 発達性読み書き障害児における漢字単語音読の特徴：小学生の読み書きスクリーニング検査 (STRAW) を用いて. 音声言語医学 54 (1), 1-7.
- 2) 土方彩、宇野彰、春原則子、他 (2011). 小学4年生の漢字単語読解力と音読力、単語の聴覚的理解力に対する単語属性の影響：児童による評定値を用いて. 音声言語医学 52 (3), 225-232.
- 3) 井村順子、春原則子、宇野彰、他 (2011). 発達性読み書き障害児と小学生の典型発達児における漢字書取の誤反応分析：小学生の読み書きスクリーニング検査 (STRAW) を用いて. 音声言語医学 52 (2), 165-172.
- 4) 文部科学省 (2018). 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説国語編. 東洋館出版社.
- 5) 荻布優子、川崎聡大、松崎泰、他 (2019). 児童を対象とした漢字読み書き正確性に関する新たな評価指標作成の試み. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 68 (1), 205-217.
- 6) 三盃亜美、宇野彰、春原則子、他 (2016). 小学校6年生の典型発達児群の漢字単語音読における配当学年、一貫性、親密度、心像性の効果. 音声言語医学 57 (3), 287-293.
- 7) 高橋登、中村知靖 (2009). 適応型言語能力検査 (ATLAN) の作成とその評価. 教育心理学研究 57, 201-211.
- 8) 高橋登、中村知靖 (2015). 漢字の書字に必要な能力— ATLAN 書取り検査の開発から—. 心理学研究 86 (3), 258-268.
- 9) Uno A・Wydell TN・Haruhara N et al (2009). Relationship between reading/writing skills and cognitive abilities among Japanese primary-school children: Normal readers versus poor readers (dyslexics). Reading and writing 22, p755-789.
- 10) 宇野彰、春原則子、金子真人、他 (2017). 改定版標準読み書きスクリーニング検査—正確性と流暢性の評価—. インテルナ出版.
- 11) 山下光、大竹明美 (2004). 右利き者の左手書字能力の検討. 大阪教育大学障害児教育研究紀要 27, 71-82.